

日本の歴史 13

竹山道雄著『ビルマの豎琴』

(新潮文庫 新潮社 1959年)

稲垣 宏行

2007年9月27日、ミャンマーで軍事政権による発砲事件が発生しました。その最中、一人の邦人カメラマンが事件に巻き込まれて亡くなりました。20年近くにわたって軍事政権の支配下にあったミャンマー。そのミャンマーに目が向けられる時、『ビルマの豎琴』の話を思い出した人は少なくないのではないでしょうか。

『ビルマの豎琴』は第二次大戦末期のビルマ（現ミャンマー）が舞台で、そこで戦死した日本兵たちを弔うため、僧となった水島上等兵が主人公として登場しています。隊長らは一緒に日本へ帰るよう呼びかけますが、水島は最後まで拒絶し、ビルマに留まる決意を捨てませんでした。本書における主人公水島の人間的魅力もさることながら、兵士たちに歌を教え、規律と慰めと団結を与えた隊長や彼の同僚である兵士たち、そしてビルマに暮らす人々も、この物語に触れる上で切り離せない存在と言えます。

ところで、第二次大戦中の戦地と言えば、真っ先に悲惨一色で彩られた光景のみを思い浮かべる人が多いかもしれません。第二次大戦の日本軍をテーマにした小説・ノンフィクション・ドキュメンタリーといった出版物や番組も、大半がそういう描写をしている様に見受けられます。しかし、竹山氏の描く戦地の一つビルマの物語からは、人間の持つ優しさ、自然や音楽を愛する心、ビルマの文化に対する尊敬の念など、むしろ悲惨とは程遠いものが文章の前面に押し出されているように感じられました。たとえ国が違っていても、異国の人々と心を通い合わせ、自国とはかけ離れた文化や風土に対し理解を示すことは、決して不可能ではない。戦地に置かれていても、そこに存在するのが悲惨なことばかりではなく、希望や喜びもある。またどの時代、どの国であろうとも、水島上等

兵のような清く強靱な心を持った人間もいる。そういったメッセージを、著者は私たちに伝えようとしているのかもしれませんが。本書が最初に刊行されたのは今から約60年前ですが、その記述に見られる著者の深い人間愛、ただ悲惨一色というイメージのみで物事を捉えない見識の広さには少なからぬ驚きと感動をおぼえました。

竹山氏も、戦時中一教師だった頃に多くの生徒たちを戦地に送り出していたといえます。当時の日本の在り様に対して不満を抱きつつも、軍国主義の風潮に抗えず自分もその一つを担ってしまい、結果生徒たちを戦地へ送ってしまったという自責の念が竹山氏に本書を書くきっかけを与えたのかもしれませんが。空襲などに見られる日本本土の悲惨な有様も、きっかけの一つになったのかもしれませんが。それでも、後ろ向きで陰惨にならず、むしろそんな負のイメージすらも前向きで温かなものに変えた著者の精神の強靱さには、ただただ脱帽させられます。

現在、世界各地で悲惨な戦争・事件・災害が発生しています。今回のミャンマーにおける事件もその象徴的な出来事と考えられます。私たちはこのような不条理に終止符を打つことは出来ないのでしょうか。もし私たちに水島上等兵のような優しさや強さがあれば、世界はもう少し平安を保てたのではないかとすら思えます。今こそ人間の

持つ魅力、異なる文化の持つすばらしさに目を向ける必要があるのではないでしょうか。本書『ビルマの豎琴』は正にそれを訴えるべく、世に出たのだと思います。また、ひとり異国に残った主人公水島上等兵も、いつかミャンマーを含め世界に安寧が訪れることを願ったに違いありません。

いながき ひろゆき（係・情報サービス課）

ビルマに残った水島上等兵は何を想ったか